堀金地域の
豊八が見守る鎮守の森の祭り

・鎮守の森は、人々の争いを鎮め神に祈る場所

・神は岩や石に宿り、大きな木に下る。

・集落が営まれた縄文時代に出現
　離山遺跡のストーンサークルは祭祈場の跡

※ ストーンサークルとは、8畳程に平たい石を敷きつめた真中に楕円形の細長い石柱を立て、敷きつめた石の外輪にも円形状に石柱を立てた遺構。

・神は大きな高い木に下り宿る。
　岩原山神神社や下堀諏訪神社の三本松（直径3m位の切り株で30mくらいの高さがあった。）

・従って神への祈りは、露地で行われた。
　神殿・拝殿・社務所等は平安時代以降中世から江戸時代に出来た。

・神社の祭りは、芸能等文化がもたらされ、発生し継承される文化の拠り所。

3－1　田多井加茂神社（市の重要文化財）

・本殿は寛政4年9月6日（1792年）建立。
作者は岩原村浅川豊八で、大隈流の作風、木鼻・虹梁・左右の妻等全ての彫物は素晴らしく、豊八最初の作である。

※ 浅川豊八と立川豊八
　岩原村（現在の安曇野市堀金岩原）出身の宮大工。
　2人は兄弟で、兄は大隈流、弟は立川流に師事し宮大工となった。
　兄は大隈流の建築師柴宮長左エ門矩重に師事し、宮大工となる。
　弟は立川流の建築師立川和四郎富棟に師事し宮大工となった。
　豊科の法蔵寺の山門は、大隈流の柴宮長左衛門矩重が棟梁で
　浅川豊八も弟子としてその建築に携わった。
　近燐に、2人の豊八が建てた社殿が多く残っている。

・祭りには地元の宮大工が作った屋台が引かれる。

・神官、氏子総代等が馬に乗った「馬飛ばせ」という神事が行われる。屋台倉の東に300m位の「馬とばせ」の道がある。古くより有ったが近年整備され復活した。

・お盆の8月15日に子供相撲が行われる。土俵が常設されている。

田多井加茂神社神殿

馬とばせの道　②

3－2　岩原山神社

・本殿は寛政4年（1792）5月岩原村出身の浅川豊八の建立で、田多井加茂神社と同一人の作品で、大隈流の作風、作品は後世に一部修復されている。

・本殿裏の高い松の木が御神木である。

・祭りは船を担いだ山車が出る。昔は境内から道路まで投げ落とす荒々しい山車であった。近年は大人用と子供用の二艘がでる。

・言い伝えだと、昔烏川上流の穂高牧に大阪・小坂という2つの集落に祀られていた祠が、大雨で現在の山神様の北の烏川に流されただよっていたのを、岩原の人たちが引き上げて祀ったものと言われる。
従って昔は、牧の氏子も神事に参列した。大雨で烏川を渡れない時は、牧の幟（ノボリ）を振って神事が行われた。牧の幟が現存している。

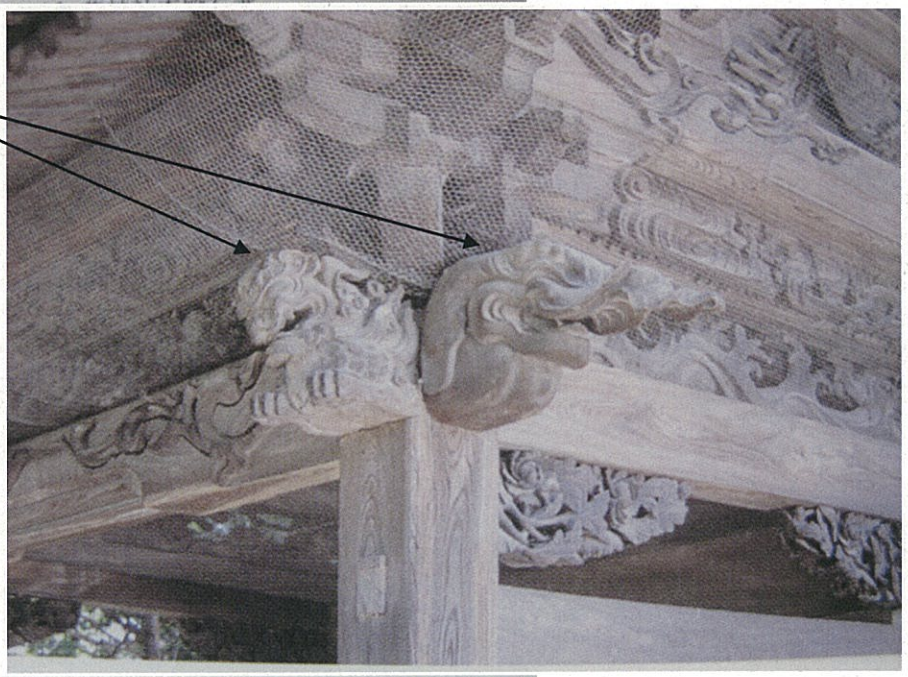
・子宝の神として、底を抜いたひしゃくが奉納される、安産の神様。

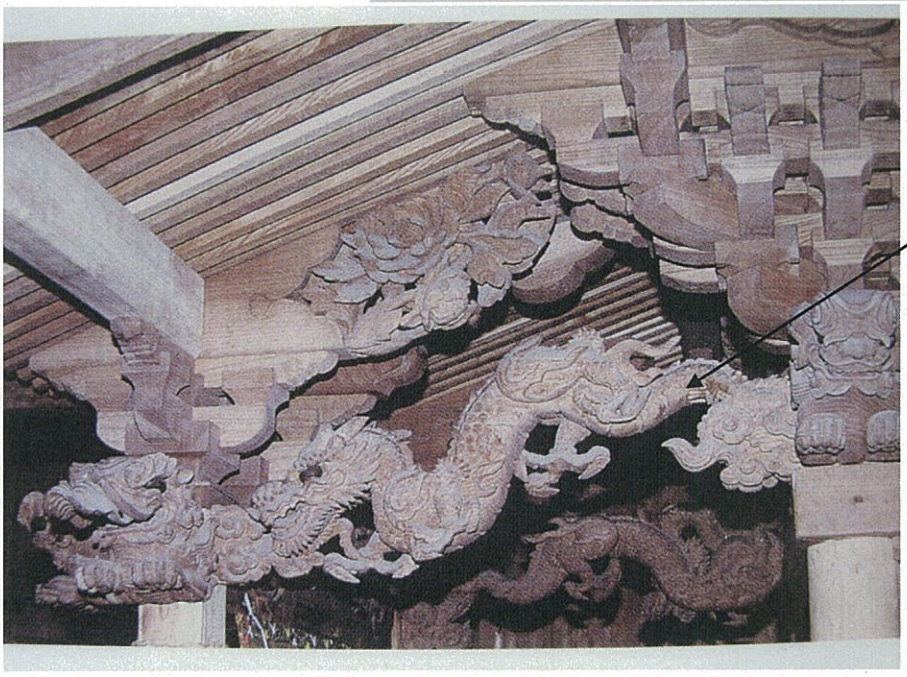
岩原山神社神殿

参考資料

妻（左妻、右妻）

木鼻
（獅子と象）





コウリョウ
虹梁（龍）

3－3　下堀諏訪神社　③

・下堀諏訪神社境内社の神明宮は、明治40年（1907年）政府の合祀指令によって、扇町諏訪神社本殿を移築したものである。

・棟札から文政5年（1821年）7月に、岩原村の大工豊八が請負、立川政吉福矩が棟梁で、建立している。

> 神明宮は立川流の彫物が施されている。
> 下堀諏訪神社の本殿は、大隈流である。

・下堀諏訪神社にはかって3本松の大木が、御神木として境内西隅にあった。

・諏訪神社の本祭りには、下堀と扇町の2台の屋台が一緒に引き回される珍しい本祭りである。屋台はいずれも立川流のものである。

下堀諏訪神社神殿

ご神木切株跡

3－4　田尻諏訪神社本殿

・本殿は、文政6年（1823年）9月田尻村の内田武六郎が棟梁で請負建立。
立川政吉が大工棟梁で、それに従う大工が矢原村の新村宗右衛門と、
岩原村の斉藤吉太郎の立川流の作品。

・田尻諏訪神社の本祭りには、舟の屋台が雄壮に引き回されている。

田尻諏訪社神殿

3－5　上堀諏訪社

・鳥居をくぐった右側（北側）に秋葉社が祀られている。
この秋葉社は、下堀諏訪神社の神明宮と同様に、明治40年（1907年）国の合祀指令で倉田村の山ノ神社本殿を氏子が1戸足りなかったため、諏訪社境内秋葉社として移築したもの。

・秋葉社本殿は、文政9年（1826年）岩原村の立川豊八が棟梁で矢口太七と共に建立している。
棟札と倉田堰開削時の古文書から明らかである。

・諏訪社の本祭りには、素晴らしい彫刻を施した屋台が引き回される。

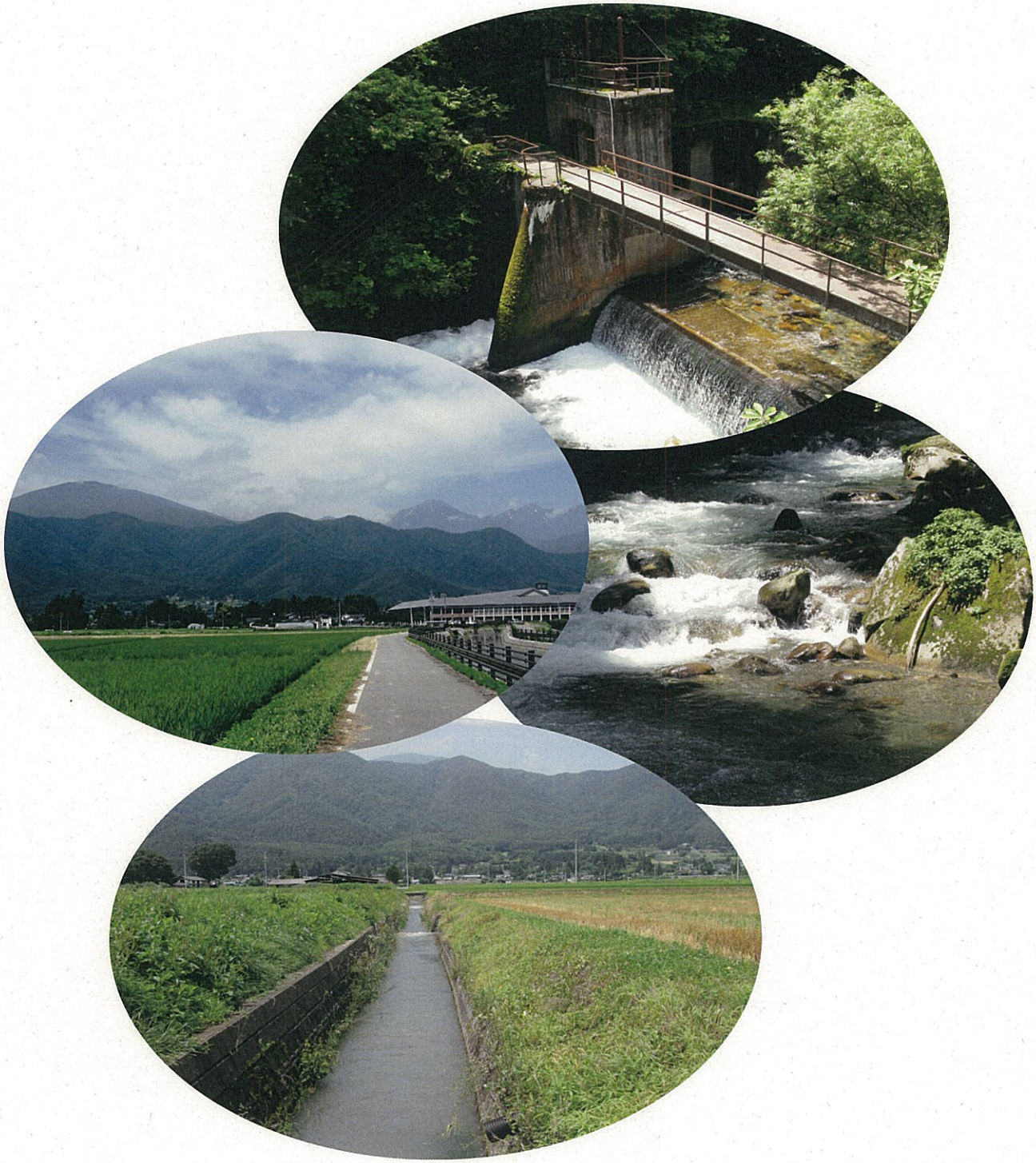
浅川豊八は、安曇野市田多井から北、南小谷村までの間に6社を建立している。
また立川豊八は安曇野市の岩原から、池田町・大町市まで9社を建立している。

上堀諏訪社神殿

秋葉社

豊八が見守る鎮守の森神社所在地

堀金地域の山・・・川・・・水



平成23年9月28日

堀金公民館

堀金地域の山・川・水

4－1　陽子も登った常念岳

・標高2857m　一名「まゆみ沢山」、「まゆみ岳」とも言い、延喜式所載の猪鹿牧の「まゆみ」（馬斉）が語源

・正保年間（1644年～48年）には、乗鞍岳とあり享保9年の「信府統記」には「常念岳」とある。

・春先には、雪どけが始まると「常念坊」の雪形が出現する。

4－2　蝶の雪形と蝶ケ岳温泉

・標高2664m　正保年間（1644年～48年）の国絵図に見られ、残雪が蝶の形に見えることからその名が付いた。

・この名前をとった「蝶ケ岳温泉」がある。堀金の「ほりでーゆ～四季の里」である。泉質は単純弱放射能冷鉱泉で、神経痛・筋肉痛・間節痛・高血圧慢性婦人病のほか多くの効能があるとされている。

4－3　大滝山・鍋冠山と大水沢の滝

・大滝山は標高2614m　「信府統記」では「大岳」となっている。南麓に大滝小滝と言われる滝がある。
大滝山の北尾根続きに、標高2194mの鍋冠山がそびえる。
丁度鍋を裏返しにした様な形に見えることからその名がついた。
更に鍋冠山の北裾に落下距離40m幅約5mの大水沢の滝がある。

・南麓や北麓に大小さまざまな滝があることから、大滝山という名前がついた。

・言い伝えとして
「鍋冠山が曇ると雨が降る」
「鍋冠山に雲があるうちは雨が降る。」

4－4　烏川の石は黒かった

・烏川は常念岳・蝶ケ岳・大滝山・鍋冠山などから発する諸沢を集め、安曇野に流れ烏川扇状地を形成した全長16kmの川で、中房川に合流する。

・正保年間の絵図では「からす川」とある。

・烏川は、粘板岩で出来ており、色が黒く烏の烏の色に似ていることから、烏川となった

4－5　烏川の水と梓川の水をまとめる深沢の谷

・田多井の東から田尻を流れる深沢沿岸は、古代縄文時代から安曇野でも一番古くから開け縄文・弥生・平安時代の住居跡や遺物が出土しているうえに、安曇盆地では一番奥まで谷で、入り江となっています。
従って烏川水系の水と梓川水系の水が一箇所で落ち合う場所が有ります。
それが三田農協北側の深沢です。

※拡大図最終ページ参照

4-6　いく条もの岩清水が流れ出す延名水　③

・“登り来て蕗(フキ)の葉で汲む岩清水”の歌が示すように、山道を登って来ると、苔むした岩壁の間からしたたり落ちる清水を見て、ホットし飲む水は命を永らえてくれる。　・・・・

・大水沢の滝の近くにある。

延名水

4－7　神秘を漂わすまゆみ池

・常念岳や蝶ヶ岳の清流を集めた大平原(オデラバラ)には、まゆみ岳の語源ともなった「まゆみ池」が清水をたたえている・

・近くには、大平砂防ダムや各種の散策の小道が整備されている。

まゆみ池

4－8　民話に残るおたねの泉

・烏川の支流小野沢の西に、24ヶ村共有山と下堀区有林の境に「おたね沢」（一名薬師沢）がある。

・ここに菊の紋章の付いた石の祠が祀られている。
この祠の下から湧き出る清水は、どんな旱魃の時でもかれないと言う。

・この湧き出る清水で味噌を掻くと腐らないし、腐った味噌でもこの清水を入れて掻き直すと美味しく食べられる様になると言う。

資料

常念坊物語

ある日のこと、有明山の方から真っ白い光の玉が飛んできて乗鞍岳の中腹に消えた。

「ありゃー八面大王の一の子分の常念坊という鬼が飛行の術でまゆみ岳へ飛んできたらしいぞ」

誰もがそう心配しました。

やがて年の暮れになり、村の市は大勢の人々で賑わいをみせていました。日が暮れて酒屋も店じまいの準備をしております と「酒、五升おくれ」

見ると髪の毛を背中までたらし、ぼろぼろの衣を着て、杖を突いた年寄りの坊さんが五合徳利を差し出して立っております。

酒屋の主人は

「ご冗談おっしゃっちゃ困ります。五升なんて入りません」と言うと、その坊さんは

「文句を言わずに五升入れてくれ」

と怒鳴りました。主人は仕方なく酒をつぎはじめましたが、不思議なことに五升の酒がこの徳利にすっかり入ってしまいました。

「どうだ、わしの言った通り入ったろうが」

そう言って坊さんはカラカラ笑うと、闇の中に消えていきました。

このように、村の市がたつと決まって坊さんが現れて酒を買って行くので山の化け者か鬼だろうと人々は噂しあいました。ある年の暮れのこと、どうにもがまんができなくなった酒屋の二人の若い衆が、山へ向かう坊さんの後をつけてみました。

年寄りとも思えないすごい速さで歩いていく坊さんを見失うまいと若い衆は走り続けました。しかし、まゆみ沢へ入っていった。

坊さんの姿は岩山の中へ吸い込まれるように消えていきました。若い衆は坊さんの消えたあたりを見つめていましたが、気を取り直して帰ってきました。酒屋の若い衆からこの話を聞いた村人たちは、

「八面大王が討たれた時に、まゆみ岳に飛んで来た常念坊に違いねえ」

と口々に噂しました。また恐れて、日暮れ時には子どもにまで、「常念坊が出てくるで、早く家に入れよ」

と言っていました。

しかし、常念坊の身なりの恐ろしさは人々の心に残りましたがその他には何も悪いことはしませんでした。

しばらくして、村人たちは常念坊の住みついているまゆみ岳のことを常念岳と呼ぶようになりました。こうして村人たち

の山の呼び方が変わってからは、暮れの市には常念坊は姿を見せなくなりました。

しかし、常念岳のその勇壮な姿とともに常念坊の姿も雪形として村人の心の中に今も生き続けています。

（平林治康著　あずみ野児童文学会あずみ野堰金の民話より）

資料

お種の泉

（お種沢）

むかし、飛騨の国（今の岐阜県）に、おたね・おすげという姉妹がいました。

「わりゃたちには、おやっさまがおるのに、なんしておりたちにはおらんのじゃろ。」

ふたりは、いつも友だちをうらやましく思っていました。大きくなるにしたがい、その思いは強くなりました。

「おやっさまを探して、ひとめ会いとう。」

ふたりの気持ちがひとつになりました。でも木地師をしていたお父さんには、幼いころ別れたままなので、その面影がはっきりしません。

「大きな人じゃろか。」

「力持ちじゃろか。」

「心の強い人にちがいねえ。」

「だが、きっとやさしい人ぞいね。」

いろいろとお父さんの人柄を心に描いては、来る日も来る日も会いたい思いをつのらせていました。

ある日、そのお父さんが、信濃の国（今の長野県）にいることを伝え聞きました。

「もしかしたら会えるかもしれねえ。」

ふたりの思いは、しだいにふくらんで、探しに行くことを考えるようになりました。

「明日にせまいか。」

「いや、もっと用意をしっかりして、あさってのほうがよかまい。」出発のチャンスをねらって、あれこれと試案しながら日を過ごしていました。

「いよいよ、明日こそ出発せまいか。」

「うんそうせまい。」

ひそかに進めた相談は決まり、その日、朝早く東にそびえる山に向かって、ふたりは家を出ました。

細くて険しい山道が続きます。木や草が生い茂り、どちらえ行ったらよいのかわからないほどの心細い道です。

「おやっさまはどんな顔をしているやろか。」

「おたねに似ているかもしれん。」

「いや、おすげかもしれんぞよ。」

お父さんを心に描くことで、足の痛さや疲れをわすれようと、ふたりはお互いに励まし合いました。梅干しを入れたおにぎりもどんどん減っていきました。

「へえーいかん。もう歩けんぞよ。」

ついに、おすげが座りこんでしまいました。

「何言ってるいるんや。おやっさんに会えなくていいんか」

おたねが手を差しのべます。ふたりの励まし合いは続きました。かなり上り、遠くの山なみが低くなりました。一歩一歩の足の出はにぶくなり、息ずかいも荒くなってきているふたりです。

その時です。あたりに明かりが増しました。

「あっ、尾根や。」

「わあー半分は来たじゃ。」

信濃の国の方へ向いて、広くなった青い空を見上げて、胸いっぱいに何回も息を吸い山の風がさわやかに、やさしく頬をなでていきます。小鳥のさえずりも、ふたりを応援しているようです。

「さあ、これからは下るいっぽうじゃで。」

はじめのうちは、楽になったと喜び合ったふたりでしたが、それからが大変でした。

足ががくがくし、すべってしりもちをついてばかりです。

まだまだ上がったり下ったりの山道は続き、小さな木の根や石ころにもつまずいて、小枝につかまろうとしても、手までも思うように動きません。

ついに、おたねも、

「へえ、体が動かんぞな。」

へなへなとうずくまってしまいました。

山ひだのいくつも入り組んだ所に来ていました。

今度はおすげが、

「でもな、だいぶ下りてきたんぞな。もうひとがんばりや人里も、もうすぐかもしれんぞな。」手をさしのべるのですが、この手にも力がありません。ふたりの体には、もう少しの力も残っていませんでした。

フキが一面に生えているくぼ地にたどり着いたとき、ふたりは、ついに倒れ込んでしまったのでした。

それから、どのくらい時間がたったのでしょうか。おたねにふっと意識がもどりました。おそるおそるあたりを見回しました。いました、おすげがいました。すぐ横に倒れていました。

「おすげ！」

いくらゆすっても、声をふりしぼっても、

「おすげ！　おすげ！」

の声もむなしく、弱々しく山にこだまするばかりで、なんの反応もありません。

すでに冷たくなっていたのでした。流す涙もかれてしまいました。

よろよろと立ち上がり、それからは、歩いたのか転げ落ちたのか、おたねにもわからなくなっていました。

かなり下がった清水の湧き出る薬師沢のほとりに、おたねも力尽きて倒れてしまいました。その湧き水を口にすることができたのかどうか、だれにもわかりません。

さて、ふたりがいなくなったことを知った飛騨の国では大さわぎになっていました。

「なんとしても、ふたりを探し出さにゃいかん。」

と、大勢であとを追ったのでしたが、間に合いませんでした。

村の人たちはあわれんで、それぞれのくぼ地になきがらを葬りました。

大きなフキが群生する所としても知られている「すげくぼ」には、ナシの木の大木が霊を宿し、おすげに似た花を毎年つけているとのことです。

また、おたねの倒れた薬師沢の地には、小さな鳥居が建ちその奥に石の祠があります。なぜか菊の紋章までついています。それに「薬師如来　お種明神」と彫られた文字碑も残っているのです。

ここの湧き水は、どんな日照にもかれないで、小さな池をつくっています。

この水を味噌かきに使うと、味噌はくさらないといわれ、むかしは、遠く越後の国（今の新潟県）からも汲みに来たそう

です。

それに、この水を目につけると、目の病は治るし、祠の物をぬすんだら、その人の目が見えなくなってしまったというお話しも残っています。

（太田千代子著　あずみ野児童文学会あずみ野姫金の民話より）

深沢の谷
（拡大図）

595m
山麓線下
（県道中萱線）

585.8m
そり表
（倉庫南）

釜土
581m

町村
572m
小学校
580.8m
578m
馬瀬口
567m
農道交差点

615m

611.05m

595m

585.8m